

薬師寺金堂現地説明会資料

1971.12.11

1. 遺構 遺構 概要

今回の調査は金堂復興工事に伴い、創建当初の遺構を明らかにするために実施された。

調査に先立ち、現基壇の写真測量をおこなった。ついで江戸時代に焼失された真正積基壇の礎石・敷瓦・向拝礎石等の置き直り及び地盤石などを取り出し、さらに向拝部の礎石・積土を排除した。以下検出した創建時の遺構について述べる。

基壇は東面29.19m、南面18.01m、假縁高1.49m(5尺)である。基壇の掘込地盤はみられず、積土は砂土と粘土の互層によって積み固められている。地盤石は地山との堅固土に据えられており、礎石はみられない。周囲の基壇石積は素石を用いた厚い羽目石を立てただけの古式の形式で、向拝の羽目石は上穹型のものを使用している。

建物は7間×4間、堂階つきで、桁行柱間総長26.73m(90尺)、梁行柱間総長15.59m(52.5尺)、軒の出4.16m(14尺)である。(各柱間寸法は図面参照)礎石は基壇土を金堂まで積上げた段階で振り込み据えられている。根回石はみられない。礎階礎石は瓦割柱礎石の直下にそれぞれ認められ、据えつけ掘方は基壇上面から切込まれていた。本柱と礎階礎石の据えつけ方がこのように何故異なるかは明らかでない。なお、礎階礎石は特に不同沈下が著しい。

礎石地盤下の管溝及び形状から、身舎の5間×2間は前面中央3間と背面中央1間が扉で、その他は壁で囲われていたと推定できる。その外の側柱筋は開放であったらしい。堂階では背面中央5間の礎石にのみ地盤石がある。その形意からみて中央の1間は扉口、両脇各2間は壁と考えられるが、背面以外の扉や窓の位置については不明である。

階段は正面では中央及び2間おいて東と西に計3個所、東西両側面と背面ではそれぞれ中央に1個所ずつ掘り間分の規模のものが設けられている。

基壇まわりには玉石敷の犬走りがあり、さらに幅0.45mの雨落溝がめぐらされている。玉石敷や溝には補修されている部分がある。

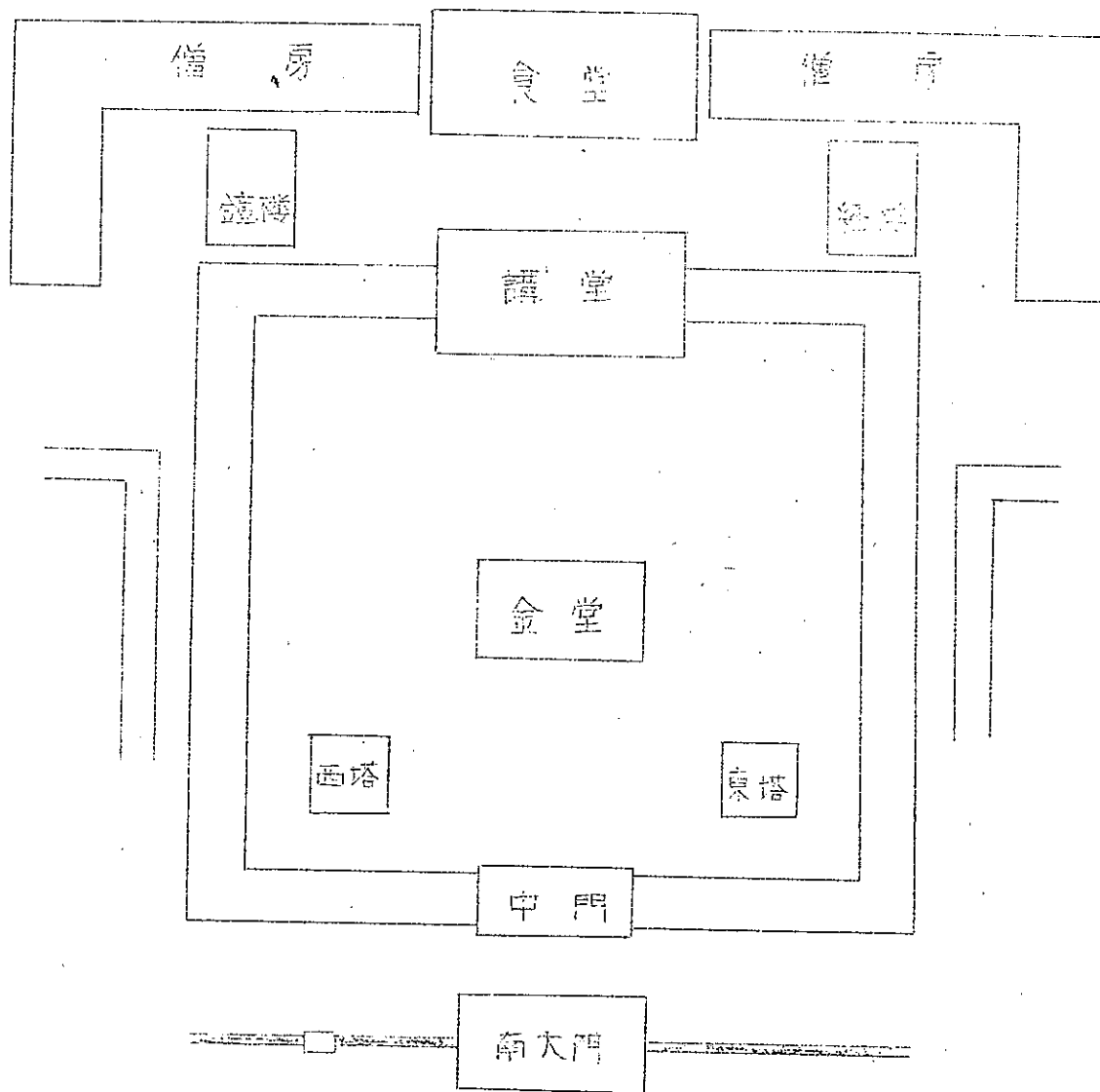
なお、創業後の遺構の変遷について述べる。享祿の火災によると思われる羽目石の焼痕痕跡や焼土面により、火災以前に、正面の東と西の階段が取除かれていたことがわかる。また現向拝礎石の真下から中世に据えられた礎石が検出され、その上面に前記の焼土層が密着するので、中央5間分には中世から規模と同規模の向拝のあったことが判明した。正面階段の取除きは向拝の設置に関連するのであろう。なおこの向拝には板張りの床が設けられた時期のあったことが、羽目石上端になされた根太仕口により推察される。唐招提寺の例などからみると、向拝部が舞台のように使用されたものと思われる。

2. 出土 遺物

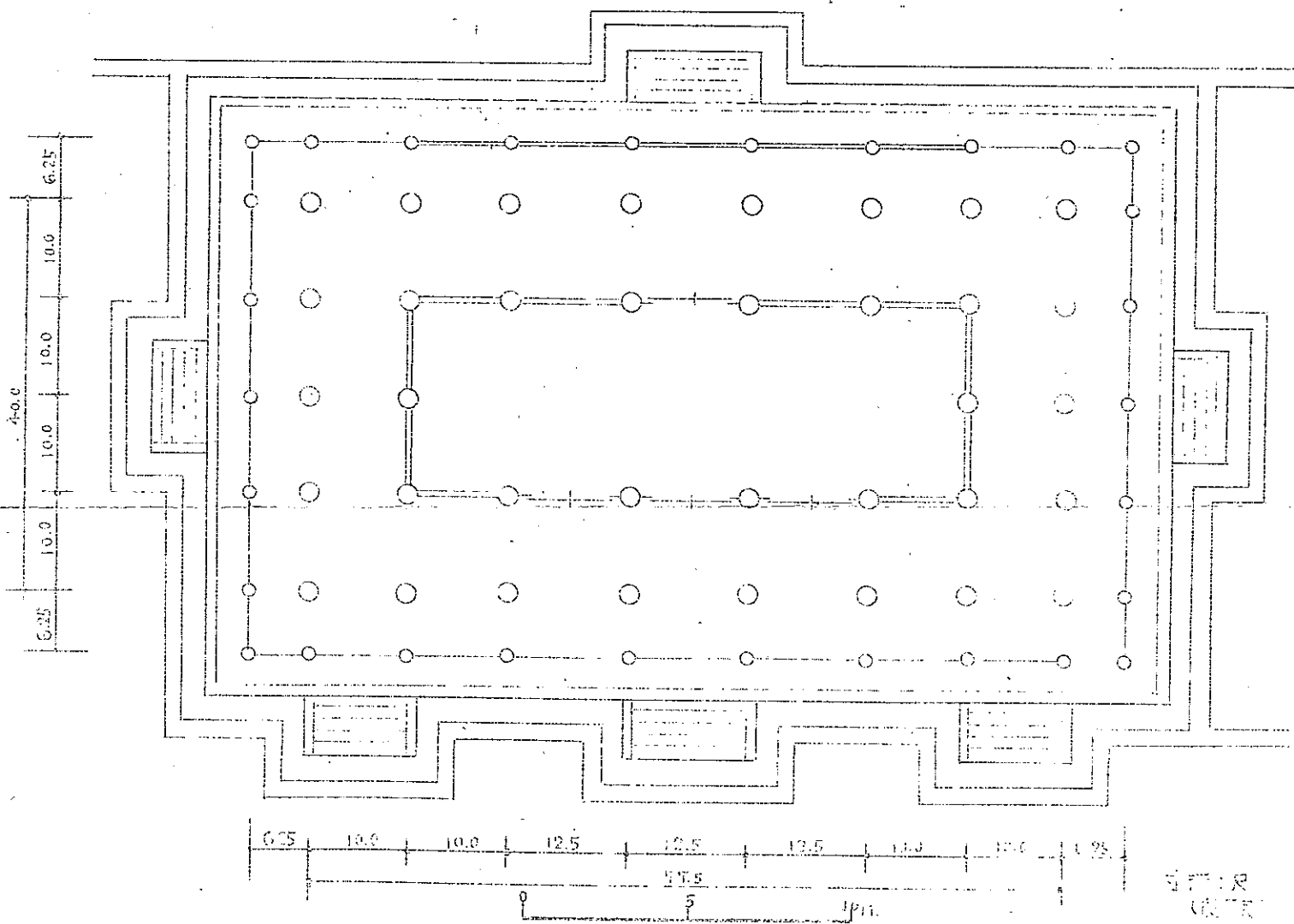
【青銅製品】 葡萄唐草文飾金具、垂木先飾金具(方形・円形)、鈴、その他 【鉄製品】 釘類
 【古銭】 大観通宝、寛永通宝、その他 【ガラス製品】 玉類 【陶器】 仏像破片
 【瓦】 蓮華文・唐文軒丸瓦、唐草文・剣頭文軒平瓦、藍瓦瓦、その他 【土器】 土師質灯籠皿、その他

3. 薬師寺 略年表

天武9年(680)	天皇、中宮(後の持統天皇)のために薬師寺の建立を発願す(本薬師寺)
孝徳2年(718)	平城京内右京大徳二坊(現在地)に移建す
天平2年(730)	東塔築つ
天保4年(973)	火災により前堂、金堂、三所階以下の僧堂焼失。金堂・東西所塔は無事
永祿元年(989)	大風により金堂上層の欄、吹落とさる。
康安元年(1361)	地震により金堂上層修葺、雨落破損す
文安2年(1445)	大風により金堂・南大門倒壊す
文安5年(1448)	仮金堂成る
大永4年(1524)	金堂再興
享祿元年(1528)	兵火により金堂・講堂・雨落など焼失す
天文3年(1539)	大風により金堂破損
天文14年(1545)	仮金堂再興(法金堂瓦器書)
慶長5年(1600)	徳川長盛 仮金堂を修葺す
寛永12年(1635)	仮金堂を瓦葺とす
延宝4年(1676)	金堂修理再建



西置配殿圖



金堂復原平面圖